雜 纂

「ヴィタミン」ト耳鼻咽喉科の疾患ノ治療

Vitamine und Ohren-, Nasen- und Halsheilkunde.

von

Dr. M. Baer, Ohrenarzt, Biel (Schweiz)

(Aus Monatsschrift für Ohrenheilkunde und Laryngo-Rhinologie Jahrg. 72, Heft 9)

歴史的の事象ハ徐々ニ階段的發展ニ依リ現ハレテ來ルカト思フト。突如トシテ爆發的ニ現ハレテ來テ躍問題ノ中心ヲ占メテ了フ場合ガアル。

此法則ハ世界ノ政治史ニ就テ當テハマルノミナラズ。醫學史ニ就テモ認メラレルモノデアル。例ヘバ血液循環ノ發見。細菌ノ發見。細胞病理學ノ樹立。素質ノ問題等ハ之ガ現ハルハヤ醫學思想ヲ極メテ短時日ノ内ニ根本的ニ改革セシメタノデアル。

次ニ述ベントスル「ヴィタミン」ノ問題モ亦醫學觀ニ根本的の改革ヲ齎スベキ役割ヲ帶ビテキルト考ヘラレルノデアツテ。未ダ其輪廓ガ茫漠トシテキテ異論モ多ク。假設の事項モ多キニ關ラズ。醫學思想ノ根本的の改革者タル希望ヲツナグベキ事實ガ存シテキルノデアル。

前世紀ノ中葉ニ於テ化學及ビ物理學ノ進歩ハ榮養ノ問題ニ手ヲ染メシムルニ至ツタ。先ヅ神經支配ノ研究ニ伴ヒ。其物理學側面ガ明カニサレ。之ト相並ンデ消化腺及ビ内分泌腺ノ榮養ニ對スル役割。酵素ノ作用並ニ其立體化學的特異性。腸内細菌叢ノ意義。滲透現象ノ榮養學の意義等化學的側面ニ對スル知見ガ明カニサレ。早

クモ前世紀ノ終リ頃ニハ箇々ノ知見ヲ纏メテ其意義ヲ深メ。進ンデハ之ヲ治療ニ應用セントスル氣運ニ至ツタ。

Rubnerニヨリ始メラレタ「エネルギー」論的觀察法ハ榮養現象ヲ今マデニ到着出來ナカツタ程マデニ理解シ易クシタシ。Voit及ビ其學派ノ榮養學ハ榮養ノ問題ヲ最後ノ根柢マデ明カニシタ様ニ見エタ。ソシテ彼等ノ教理ニ合致シナイ様ナ實驗の結果ハ總テ人ノ注目ヲ惹カズ忘却サレテ顧ミラレナカツタノデアル。然ルニ熱帶ノ醫師達ノ手ニヨリ。脚氣病ガ白米ヲ主食トスルニ基ヅク榮養障害ト考ヘラレルニ及ビ。再ビ夫等ノ事實ガ注目ヲ惹ク様ニナツタ。之ニ決定的ナ支持ヲ與ヘタノハ1897年Eijkmannノ行ツタ實驗的多發性神經炎ニ關スル研究。及ビ之ニツマク數多ノ研究者達ノ研究デアル。彼等ハ吾々ノ榮養ニ對スル見解ヲ根本的ニ變化セシムル基礎ヲ與ヘタモノデアル(Stepp, Kühnau及Schroder)。

之等ノ研究ガVitaminノ發見トナルニ及ンダノハ約40年前デアリ。Funkガ其重要ヲ表現スル名稱ヲ與ヘタノハ約25年前デアル。此25年間ニ化學者。醫學者及ビ生物學者ノ共同的

努力＝ヨリ夫等ノ物質ノ大多數ノ全部又ハ一部
ガ把握サレル＝至リ化學的性質＝基ヅイテ脂溶
性及ビ水溶性「ビタミン」。生物學的作用＝從
ツテ抗壞血病性、抗眼球乾燥症性、抗佝僂病性、
「ビタミン」。又發見順序＝依リ A, B, C, D
「ビタミン」＝分類サレル様ニナツタ。「ヴィ
タミン」ハ一部ノ例外ヲ除イテハ大部分植物界
＝於テ生成サレ人間及ビ動物ハ源ヲ植物界＝仰
イデキルガ、「ホルモン」ハ同様ニ使命ハ持ツテ
キルガ動物體內產物ト看做サレテキル。

最近＝至リ斯カル明確ナ境界ハ化學的＝モ生物
學的＝モ成立シ得ズト看做サレル＝至リ、「ホル
モン」、「ビタミン」ハ勿論酵素モ相互＝近縁
關係ノアル物質デアツテ「エネルギー」供給者
トシテデハナク、新陳代謝ノ觸媒及ビ調節物質
トシテ作用スルモノダトノ見解ガ一般ニナラン
トシテキル。斯クノ如ク考ヘ及ブトキハ、「ヴィ
タミン」Cガ「アドレナリン」ノ急激ナ崩壊ヲ防
止スル事、「ビタミン」Aガ「チロキシ」ノ
作用ヲ阻害スル事、更ニ「ビタミン」相互ノ
間＝協力作用及ビ拮抗作用ノアル事ナドガ全體
的＝把握シ得ルノデアル。

「ビタミン」ノ供給ガ充分ナラザル時＝ハ「ヴィ
タミン缺乏症」(Avitaminosis)ガ起ル。之ハ
動物實驗＝於テハ極端＝一方的ナ營養供給ヲ永
ク續ケタ場合＝ノミ起リ得ルモノデアツテ、人
間デハ乳兒及ビ小兒ヲ除イテハ極メテ稀デア
ル。即チ成人デ「ビタミン」缺乏症ノ起ルノ
ハ、或ル民族ガ米ヲ主食トスル云フ様ナ文化
的原因、又ハ戰爭遠征ト云フ様ナ特殊ナ條件ノ
存在スル場合＝限ラレテキルノデアル。勿論
「ビタミン」B₁ノ如キ例外ノ存スル事ハ言フ
俟タナイ。

斯クノ如キ見地カラシテ、一般醫家ハ「ヴィタ
ミン」缺乏症ノ意義ヲ輕視シテ差支ヘナイト信
ズル。然ルニ部分的ナ「ビタミン」ノ缺乏狀態
即チ「ビタミン」不全症 (Hypovitaminosis)
ハ極メテ重要ナモノデアツテ、一般醫家ハ常ニ
之ニ注目シテキナケレバナラス。

「ビタミン」不全症ノ特徴ハ何處ニアルカト
云フニ、夫レハ臨牀的徴候ガ缺乏シテキルカ、
又ハ存在シテキテモ多種多樣ヲ極メテキル所ニ
アル。例ヘバ終ニハ定型的ナ症候群デアル麻痺
狀態、心臟障礙、水腫及ビ疼痛ヲ現ハシテ來ル
所ノ脚氣病モ初期＝ハ疲勞、筋肉ノ脱力感、食
慾缺乏、便秘、不定ノ神經痛様疼痛、知覺異常
等ヲ示スノミデアルガ、之等ハ他ノ「ヴィタミ
ン」缺乏狀態デアル壞血病ヤ佝僂病ノ初期ニモ
表ハレル症候ナノデアル。

「ビタミン」不全狀態ガ今日非常ニ屢ニ認メ
ラレルト云フ事ハ極メテ重要ナ事デアル。勿論
其證明ハ間接的ニ動物實驗或ハ「ビタミン」
療法ノ效果ニヨリ云ヘル事デアル。何故ナレバ
今日＝於テハ「ビタミン」Cヲ除イテハ之ヲ
直接ニ定量スル方法ガナイカラデアル。「ヴィ
タミン」Cノ定量法トテモ簡單デハアルガ、他
種「ビタミン」ニ對スル複雑ナ生物學的、化
學的定量法ト同ジク、少ナカラザル誤差ヲ生ズ
ル缺點ガアル。

多クノ人が營養ヲ非合目的ニ攝取スル事ハ疑ヒ
ノナイ事實デアツテ、就中工業ノ發達シタ文明
ニ於テハ之ガ著シイト考ヘラレル。「ヴィタミ
ン」ハ極メテ不安定ナ物質デアツテ腐敗、加熱
又ハ不適當ナ調理ニヨリ急激ニ破壞サレル。例
ヘバ肉汁ヲ作ルトキ「ビタミン」B₁ノ50%ハ
破壞サレルノデアル。尙ホ多クノ地方即チ北

ヨーロッパ又ハ山岳地帯ニ於テハ野菜ノ供給不
充分ノ爲メ肉食ヲ主トスルニ至リ、之モ「ヴィ
タミン」ノ供給ヲ不充分ナラシメル。

現今ノ研究範圍デハ「ビタミン」A ノ不全ガ
多クノ人ニ存在スルヤ否ヤハ明ニサレテキナイ
ガ、「ビタミン」B₁ ノ不全ガ多クノ人ニ認め
ラレル事ハ事實デアツテ、Schröder ハ病院ニ
於ケル食事ニモ其不充分ヲ認め、Stepp 等ト共
ニ我々ノ領域ニ於デモ B₁「ビタミン」缺乏症
ノ危険ガ存スル事ヲ警告シテキル。

又多クノ研究ニヨリ一見健康ニ見エル人ニモ C
「ビタミン」不全ガ存スル事ガ證明サレテキ
ル。夫レニヨレバ春季ニ疲勞シ易イノハ冬季ノ
終リニ「ビタミン」C ノ補給不充分ガ高度ニ
達スル爲デアルト云フ。之ハ其症候ガ「アスコ
ルビン」酸ノ投與ニヨリ消失スル事ニヨツテ證
明出來ル。

「ビタミン」D ノ不全状態モ多ク、明カニ
「ビタミン」D ノ缺乏ニヨリ起ル所ノ佝僂病
様ノ骨組織變化ガ「レントゲン」検査ノ際ニ屢
屢見ラレルノハ此爲デアル。

「ビタミン」不全症ノ起リ得ルノハ然シ供給
不充分ノ際バカリデハナイ。供給其物ハ充分デ
アツテモ需要ガ増加シ又ハ吸収ガ不充分デア
ル場合ニモ之ガ起ツテ來ル。

「ビタミン」ノ需要増加ハ一般ニ新陳代謝ガ
高マツタ場合ニ起ル。即チ小兒期、妊娠時、授
乳期、バセドウ氏病ノ如キ内分泌障礙性變化ノ
存スル場合、發熱時亦恐ラク總テノ生命現象ガ
活潑ナ春季等ガ夫レデアル。傳染性疾患ノ場合
ニハ體温上昇ノ爲メノミナラズ、細菌ノ存在夫
レ自身が「ビタミン」ノ需要ヲ増加セシメル
ト考ヘラレテキル。需要増加ニ關シテハ「ヴィ

タミン」B₁ニ就テ得ラレタ知見が大イニ參考ト
ナルノデアツテ、夫レニ依レバ食料ノ變化、外
界温度、體軀ノ大キサ及ビ仕事量ノ如何ニ依
ツテ「ビタミン」ノ消費量ニ影響ガ與ヘラレル
ト云フ。

胃腸ノ炎症性變化ハ抗壞血病性「ビタミン」
ノ吸収ヲ高度ニ阻害スル爲ニ、供給其物が充分
デアツテモ部分的「ビタミン」C 缺乏ガ起
ル。同様な現象ハ「ビタミン」B₂ニ就テモ存
スル事が最近確定サレタ。之ニヨルト「アルコ
ール」性多發神經炎ノ麻痺状態ハ「アルコール」
其物ノ結果デハナク、胃液缺乏症ヲ伴ツタ慢性
胃炎ノ基礎ノ上ニ發シタ「ビタミン」B₁不全
症ノ結果デアルト云フ。

之等ノ「ビタミン」不全症ハ如何ナル意味ヲ
有スルカト云フニ、久シク前カラ「ビタミン」
ノ缺乏状態ハ傳染性疾患ニ對スル罹患傾向ヲ促
進スルト云ハレ、一時此關係ガ明瞭デアツタノ
デ「ビタミン」發見當時壞血病モ佝僂病モ脚
氣病モ一種ノ傳染性疾患ト看做サレタ事モアツ
タ。現在動物實驗ニ依レバ「ビタミン」缺乏
症ノ末期ニハ常ニ敗血症の現象ガ認めラレテキ
ル。之ハ「ビタミン」A 缺乏症ノ際ニ特ニ顯
著デアツテ、平常時ニ何等病原性ノ認めラレナ
カツタ腸内腐敗菌モ病原性ヲ獲得スルニ至ル。
之ハ其生物學的檢定ニモ應用サレル現象デア
ル。Jurasz 及ビ其他ノ人々ニ依レバ「ヴィ
タミン」C 即チ「アスコルビン」酸ノ含有量ト毒
性及ビ免疫性トノ間ニハ密接ナ關係ガ存在ス
ルト云フ。此種ノ問題ハ未ダ根本的解決ヲ得ル
ニハ至ツテキナイガ、兎モ角傳染性疾患ノ重篤サ
ト之ニ合併シテ現ハレル「ビタミン」不全症
トノ間ニ並行的關係ガ成立スル事ハ大體ニ於テ

確定的ダト思ハレルノデアル。

上述シタ事ヲ總括スルト次ノ事が云ハレル。即チ「ビタミン」不全症ハ多イモノデハアルガ歴然タル臨牀的徴候ヲ缺如スル爲ニ往々ニシテ看過サレル。然モ之ハ傳染性疾患ノ經過ニ對シ不利ナ影響ヲ與ヘルノデアル。

上述ノ事柄カラ我が耳鼻咽喉科科學ニ對シテ如何ナル展望ガ下セルデアラウカ。

一般耳鼻咽喉科の疾患ニ對シテモサウデアルガ、特ニ傳染性ノ臨牀像ヲ呈スルモノニ對シ、我々ハ凡ユル種類ノ「ビタミン」不全症ヲ考慮スル必要ガアル。斯ク考ヘル事ニ依ツテ、在來稱ヘラレテ居タ經驗的事實、即チ肝油療法、肥肝療法及ビ生食療法等ガ多クノ上氣道疾患ニ對シ多大ノ效果ガアルト云フ事實モ明確ニ首肯出來ルノデアル。例ヘバ腺病性尙癆病性ノ小兒ニ於ケル慢性ノ耳涎ハ局所療法ニ依ツテデハナクスカル療法ニ依リ全身ノ強壯化ヲ圖ル事ニ依ツテ消失スルト云フ。

學問ノ立場カラ行ケバ、斯カル不定ナ報告ノ多イ事ヨリモ寧ロ「ビタミン」ノ生物學的態度ノ數的ナ把握ノ方ガ望マシイ釋デアルガ、實際家ハ只「ビタミン」療法ノ效果及ビ其處方ニノミ興味ヲ有シテキルノデ止ムヲ得ナイノデアル。兎モ角今日ノ研究方法論ハ未ダ缺陷ガ多ク、研究ノ對象ニ選擇シタ少數ノ問題デサヘ未ダ希望通りニ明確ニ解決サレヌ狀態ニアル次第デアルカラ、著者ハ問題ヲ最モ良ク知ラレタ「ビタミン」A, B₁, C, Dニ限ツテ論ジャウト思フ。他ノ「ビタミン」ト我々ノ専門科トノ關係ハ未ダ全然知ラレテ居ナイノデアル。

「ビタミン」Aハ先ヅ鼻科の並ニ咽喉科の疾患ニ對シテ非常ニ重要ヲ持ツテ來ルデアラウト

豫想サレル。表皮保護性「ビタミン」Epithelschutz-vitaminト云フ命名法ハ之ガ外皮膚及ビ粘膜ニ對シテ特ニ影響ヲ持ツテキル事ヲ物語ツテキル。斯ク考ヘレバ眼球乾燥症ニ對スル著明ナ治癒的作用ハ更ニ大キナ作用ノ一部分ニ過ギスト考ヘラレル。Pillatハ支那ニ於テ多數ノ「ビタミン」A不全症及ビ缺乏症ヲ觀察シ、之ニ對スル全般的考察ヲ公開シテキルガ、其中我々ノ専門領域ニ興味アル現象ヲ取り上ゲテ見レバ次ノ通りデアル。

1. 著明ノ角質増殖性又ハ不全角化性變化ヘノ移行ヲ伴ツタ結膜乾燥症。結膜乾燥症ハ皮膚ニモ及ビ、皮膚ハ乾燥シテ光澤ヲ失ヒ面癩ヲ生ジテ來ル。

2. 鼻部ニ於ケル皮膚粘膜ノ移行部ハ表皮化ノ進行ニ伴ヒ上方ニ移動スル。此現象ハ左程著明デハナイケレドモ口唇ニ於テモ認メラレル。

3. 臭鼻症、嗅覺ノ減退及ビ口腔粘膜ノ潤濁ニ就テモ同様な原因カラシテ起ツテクルモノデアル。

4. 咽聲ハ喉頭ノ鞏皮症性變化ニ依リ起リ、氣管枝炎ハ氣管枝粘膜上皮ノ全般的機能減退ニ依リ起ルモ、孰レモ皮脂腺、汗腺及ビ粘液腺ノ分泌機能低下ヲ以テ始マル。

「ビタミン」Aガ「チロキシ」ノ拮抗物質トシテバセドウ氏病又ハ癯症ノ際ニヨク奏效スル事モ一言スルニ足ル。「ビタミン」Aハ食欲ヲ高メ種々ノ胃内分泌障礙ヲ正常化シ、更ニRehnニ依レバ腸病又ハ肝臟病ノ存在スル場合ニ麻醉障礙ノ豫防ニ效アリトサレテキル。今日體質性、「アレルギー」性若シクハ血管運動神經性障礙ト看做サレテキル多クノ臨牀像モ「ビタミン」ノ缺乏若シクハ不全狀態ト考ヘラレテ

キルガ。之等ノ疾患ニ對シテモ「ビタミン」Aハ特別ナ意義ヲ有スルニ至ルデアラウト豫想サレル。

「ビタミン」Aガ抗傳染病性ノ性質ヲ有スル爲メ。之ヲ傳染性疾患ニ用ヒテ適當デアラウト豫想サレタガ。果シテ實際眼球乾燥症潰瘍ニハ經口的ナルト局所的ナルトヲ問ハズ著效ノアル事ガ知ラレタ。此臨牀の實驗カラ出發シテ多クノ醫家ハ「カタル」性傳染病。「インフルエンザ」肺炎。産褥熱等ニ應用ヲ試ミ。既ニ其一部ニ於テ著明ノ效果ヲ認メル事ガ出來タ。特ニ風邪性氣管枝炎。枯草熱。喘息及ビ小兒ニ於ケル皮膚諸疾患。「フルンクローゼ」。若年性痤瘡及ビ其他ノ皮膚病ニ對スル效果ニハ見ルベキモノガアル。又 Löhrニヨリ始メラレタ肝油軟膏ヲ以テスル傷創治療ハ壊死ニ陥ツタ傷創面。皮膚ノ大キナ缺損部。重症ノ火傷。「レントゲン」潰瘍等ニモ效果ガ適當ニアルガ。此際ニハ「ビタミン」Aノ外ニ尙ホ「ビタミン」Dガ影響ヲ及ボシテキルノデアル。此2種ノ「ビタミン」ハ多クノ協調的關係ニアルノミナラズ。化學的ニモ近似的關係ニアリ。共ニ脂溶性デアツテ。市販ニ供セラレル多クノ食料品中ニモ同時ニ見出サレル。

上ノ事柄カラ何程ノ信賴ガ出來ルデアラウカ。總テノ上氣道傳染症ニ際シテ「ビタミン」Aヲ處方スルノハ當ヲ得タ事デアラウカ。又此方法ニ依ツテ萎縮性病變例ヘバ「ビタミン」缺乏症ニ原因スルト稱セラレル臭鼻症モ治癒セシメ得ルモノデアラウカ。

一般ニ複雑ナ原因ヲ有スル疾患ニ際シテハ其治療結果ヲ判斷スルニハ注意ガ適當デアルガ。傷面ノ治療ノ如キ現象ハ比較的簡單ナ問題ト看做

シテ差支ヘナイト思ハレル。夫レニモカ、ハラズ。最近 Löhrノ肝油療法ニ對シテ嚴重ナ批判ヲ下スモノガアル。夫レニ依レバ。Löhrノ成績ニハ誇張サレテキル點ガアリ上皮形成ノ急激トナルノハ「ビタミン」ニ依ルモノデハナク物理化學的關係ガ良好ニナル爲メデアルト云フ。此異論ニ對シテハ我が耳鼻咽喉科學界ハ何等ノ反響ガ現ハレテキナイ。此問題ハ大外科の方面デ孰レニカ決定サルノヲヨシトスル。然シ動物實驗カラ臨牀上ニ期待サレテキタ效果ガ實際上ニ證明サレテキナイ事ハ明カデアツテ Chervatハ此點ヲ強調シテキル(Z.f. Vitaminforschung)。著者モ上氣道ノ炎症の變化殊ニ萎縮性ノモノハ「ビタミン」A缺乏ト密接ナ關係ガアルト信ズル一人デアツテ。Chervatノ云フ如キ見解ガ夙ニハンガリアノ醫家例ヘバ Liebermann(臭鼻症ニ就テ)。Lenart(慢性喉頭炎ニ就テ)ニ依リ稱ヘラレタ事ヲ大イニ快シト思ツテキル。然シ現在ノ所孰レニシテモ斷定ハ只想定のニノミ下シ得ルモノデアツテ。最初ニ舉ゲラレタ問題ニ對シテハ “Ignoramus” —我々ハ知ラナイ (Du Bois Raymondノ放ツタ有名ナ言葉)ヲモツテ答ヘナケレバナラナイ。依ツテ「ビタミン」療法ガ單ニ全身の強壯作用ヲ呈スルニ過ギナイノカ。又ハ夫レニ止マラズ特異的作用ヲモ呈スルノカハ未解決ノ問題デアル。長イ前カラアメリカノ研究者達ガ化膿性副鼻腔炎症ヲバ「ビタミン」Aノ缺乏ノ爲ト看做シテ居タノニ現今此聲ガ沈黙スルニ至ツタノハ種々ナ意味デ特記スベキ現象デアル。Glasscheibガ臭鼻症ヲ「ビタミン」A及「ビタミン」Dデ治癒セシメタ事ハヨク知ラレタ事柄デアルガ最近 Griebelニヨツテ「ヴィ

タミン」B₁ノ追加ニヨリ補強サレル事ガ知ラレタ。

抗佝僂病性「ビタミン」D ハ齒牙及ビ骨組織疾患以外ニ「ビタミン」A ノ場合ト同様ナ疾患ニ用ヒラレル。即チ喘息、枯草熱、「アレルギー」性及ビ植物神経性内分泌性疾患、甲状腺中毒症、濕疹ナドニ用ヒ又結核症ノ場合ニ體ノ抵抗ヲ高メル意味デ用ヒラレル。然シ之等ノ臨牀の経験ノ追試ハ未ダ充分デナク矛盾スル點モ多イ。著者ハ臨牀的ニ「ビタミン」A 及 Dヲ檢出スル方法ノ存シナイ限り、此論文上デ新シイ不確實ナ事ヲ多ク云ツテ論難點ヲ明カニスル事ハ不可能デアルト信ズル。

次ニ抗神経炎性「ビタミン」B₁ニ移ル。先ヅ脚氣ガ吾ガ國ニ於テモ認メラレ得ル證據ヲ擧ゲヤウ。脚氣病ハアメリカノ統計ガ示ス様ニ正常ノ環境デハ餘リ認メラレナイケレドモ、熱性病ノ際或ハ文明國ニ普通ノ糖分多キ白「パン」ノ如キ食料品ヲ主食トスル際ニハ「ビタミン」B₁ノ需要量ガ高マツテ現ハレテクル。營養療法ノ多クニモ亦「ビタミン」B₁ノ缺乏が見ラレ、胃潰瘍、糖尿病、腎臓病、膽嚢病、腸病ノ際ニモ同様デアル。又失業者ヤ貧乏人ハ「ビタミン」B₁ニ乏シイ馬鈴薯ヲ多ク食ベル爲ニ脚氣ガ屢ニ認メラレル。

Géronne ハ數箇月間 2—3 kgノ馬鈴薯ヲ唯一ノ食料トシテキタ 1人ノ男子ニ就キ、Garam-völgyi ハ馬鈴薯ト小麦粉製品トヲ主食トシテキルハンガリアノ貧民ニ就キ夫々脚氣病ヲ認メテキル。

「ビタミン」B₁ノ缺乏狀態ニ關スル知見ハ最近ノ 2年間ニ急速ニ發展ヲ遂ゲタ。夫レハ 1936年ニ「ビタミン」B₁即チ「アノイリン」Aneu-

rin ノ化學的構成ガ明ニナリ其後間モナク人工的合成ニ成功シタカラデアル。此爲ニ、今迄經口的ニ「ビタミン」ノ必要量ヲ與ヘル事ノ不可能ナ爲メ解決サレナカツタ問題ガ治療效果ニヨツテ (ex juvantibus) 解決出來タノデアル。高度ニ濃厚ナ「ビタミン」B₁ハ嘔氣ヲ催シテ來ル爲メ、經口的ニ長時日連用スル事ハ稀デ通常筋肉内ニ投與セラレル。普通水溶液トナシテ用ヒラレルガ極量ト云フベキモノナク、「ビタミン」A, 「ビタミン」D ノ如ク大量ニ過ギタ爲メ中毒症狀ガ現ハレルト云フ様ナ事ハナイ。

「アルコール」性多發性神経炎ガ「ビタミン」B₁ノ缺乏狀態ノ結果デアルトノ知見カラ出發シテ、「アノイリン」ヲ用ヒテ種々ノ神経炎ヲ治療セシメントスル試ミガナサレタガ、初メ其結果ハ良好デナカツタ。之ハ「アノイリン」ガ小量ニ過ギタ爲メデアル。然ルニ「ビタミン」B₁ノ純製品「ベネルヴァ」Benerva, 「ベタビオン」Betabion, 「ベタキシン」Betaxin ガ高度ニ濃厚ナ形デ製造サレル様ニナツテ以來其成績ハ良好トナツタノデアル。茲デハ紙面ノ都合上之ニ關シタ文献並ニ夫レニ對スル論難ヲ掲ゲル事ハヤメル。之ニ對シテハ若干ノ證明ヲアゲレバ充分デアラウト思フ。

「ビタミン」B₁療法ハ「アルコール」性多發性神経炎ノ外ニ胃腸障碍ニ基ヅク神経炎性變化、妊娠時及ビ傳染病殊ニ「マラリア」、「インフルエンザ」、「デフテリー」罹患後ニ現ハレル神経性變化、又「ニコチン」、砒素、昇汞中毒時ノ神経炎性變化又ハ視神経萎縮、惡性貧血、索性背髓症、「コレア」及ビ精神病ノ如キ上ニ類シタ諸變化ニモ應用サレル。

次ニ述ベル事實ハ1年半モ前ノ事デアルガ興味深イト思ハレル。

著者ハ中耳炎ノ一婦人ヲ「ビタミン」 B_1 デ治療シタノデアル。此場合ノ中耳炎ノ經過ハ臨牀的ニ極メテ不定型的デアツタガ、乳嘴突起切開術ノ際靜脈竇ガ前方位ヲ取ツテキル事ヲ發見シ、夫レニ依ルモノデアラウト考ヘラレタ。

手術後ニ恐ラク外傷性ノ顔面神經不全麻痺ガ現ハレタガ、之モ斯卡ル解剖學的變異ニヨルモノデアラウ。即チ最近 Rejtö 教授ガ Mschr, Ohrenheilk. デ述ベラレタ様ナ條件ガ存シテキタモノト思ハレル。此不全麻痺ハ幸ニシテ5時間後ニ消失シタガ、此代リニ中枝及ビ下枝ノ支配部位ニ耐ヘラレナイ疼痛ガ現ハレテキタ。此處デ思ヒ出スノハ顔面神經ハ Neumann ニ依レバ知覺神經ノ中デモ敏感ナ知覺神經ヲ含ンデキルタメ、顔面神經不全麻痺ノ際ニ時トシテ耳痛ヲ伴フ事ガアルト云フ事デアル。

著者ハ之ニ對シテ次ノ2日間「モルヒネ」ヲ投與シタガ著明ナ效果ガ見ラレナカッタ。依ツテ「ビタミン」 B_1 ヲ試ミタ。スルト約6時間後ニ突然耳痛ガ消失シテ了ツタ。同様な疼痛ハ夫レカラム毎日出現シタガ、段々「アノイリン」ヲ投與シナケレバナラナクナルマデノ時間的間隔ガ延ビテ行キ、10日後ニハ之ヲ中止スルモ疼痛ハ起ラナクナルニ至ツタ。

「アノイリン」デ奏效シタ神經炎症例ニ關スル今迄ノ文献ヲ通覽スルニ、其多クノモノニ於テ潜在性ノ「ビタミン」 B_1 缺乏症ヲ想定スル事が想定出來ルケレドモ議論ガ單ニ臨牀的徴候カラナサレキル爲ニ、之ヲ確定的ニ證明スルダケノ力ガナイ。何故ナレバ未ダ「ビタミン」 B_1 ヲ臨牀デ決定的ニ定量スル方法ガナイカラ

デアル。尤モ文献中ニハ「ビタミン」 B_1 缺乏狀態ヲ考ヘルノハ誇張シテキルト考ヘラレル症例モアル。著者ノ述ベタ症例モ之ニ屬スベキデ信ゼラレルノデアル。此患者ハ社會的ニモ高イ地位ニアリ、調理法ニモ何等缺點ナク、營養モ充分デアツタカラデアル。

而シテ一方動物實驗ニ依レバ純粹ナ「ビタミン」ハ副養素トシテノ作用以上ニ眞ノ治癒作用ヲモ有スルト云ハレテオリ。特ニ「ビタミン」 B_1 ハ抗神經性(neurotropisch)ノ因子ヲモツテキテ、「ビタミン」 B_1 缺乏症ガ存スルト存セザルトニ關ラズ其效果ヲ現ハスト云フ。此知見ヨリシテ「アノイリン」ヲ一般ニ總テノ神經病ニ試ミルニ至ツタ。而シテ實際「ロイマチス」性顔面神經麻痺、三叉神經痛、脊髄癆ノ際ノ槍ヲ刺スガ如キ疼痛、神經鞘腫、「ヘルペスゾステル」ノ如キ疾患ニ際シテ其效果ニハ兒ルベキモノガアルノデアル。依テ我々ノ領域ニ於テモ此知見ヲ追試スル事が望マシイ。著者自身モ顔面神經、三叉神經、上眼窩神經ノ領域ニ於ケル神經痛約30例ニ用ヒテ效果アル事ヲ認メテキル。但シ之ヲ詳述スルモ既知ノ知見以外ニ出ルモノガナイカラタマ其事實ヲ一言スルニ止メテ置ク。

其代リニ急性中耳炎ノ際ノ疼痛ニ「ビタミン」 B_1 ヲ用ヒテ效果ノアツタ例ヲ舉ゲテオク。之ニ關シテハ著者ノ知ル限り未ダ何等報告ガナサレテキナイ様ニ思ハレル。此耳痛ガ其強サニ於テ種々デアル事ハ周知ノ事實デアルガ、之ニハ多クノ精神の狀態ガ關與スルモノト思ハレル。尙ホ「ムコーズス」性中耳炎又ハ鼓膜萎縮ノ上ニ發生スル中耳炎ヲ考ヘニ入レルト炎症過程ノ強度ヤ細菌學的、解剖學的の條件ニモ其原因ガ求

メラレル。

最近著者ハ急性中耳炎ノ像ノ下ニ始マツタ水疱性鼓膜炎數例ヲ經驗シタ。此疾患ハ久シク鼓膜ニ於ケル「ヘルペスゾステル」トシテ知ラレテオリ。耳痛モアツテ文獻モ示ス通り中耳炎トノ鑑別ガ困難デアル。此事カラシテ著者ハ總テノ中耳炎ニモ隣接部位ニ神經痛様又ハ神經炎様ノ變化ガ存スルノデアラウト想定スルニ至ツタガ、同様ナ議論ハ既ニ30年前ニ稱ヘラレテオリ。之ニ依レバ人工的ニ三叉神經ヲ刺激スル事ニ依ツテ中耳炎ヲ反射的ニ起サシメル事ガ出來ルト云ツテキル。著者ハコノ想定ト神經痛ニ於テ「ビタミン」 B_1 療法ノ奏效スルト云フ事實カラ出發シテ、中耳炎ヲ「アノイリン」デ治療セント試ミタノデアル。

2例ヲ茲ニ報告スル。

第1例。40歳。「ホテル」雇人。女。

乳嘴突起部並ニ頰部ニ放散スル激烈ナ左側耳痛ヲ訴ヘテ來タ。耳鏡的ニハ鼓膜ニ輕イ充血ガアルノミデ。音叉検査並ニ言語聽力ニハ格別ノ異狀ヲ認メナイ。2日間多量ノ麻醉劑ニヨリ輕度ノ輕快ガ認メラレタノミデアル。ヨツテ3日目ニ5000單位(10g)ノ「ビタミン」 P_1 ヲ注射シタ所10日間疼痛ガ完全ニ消失シ。患者ハ發病以來初メテ一夜安眠スル事ガ出來タ。夫レ以來麻醉劑ヲ中止シ。必要ニ應ジテ「ビタミン」 B_1 ヲ注射スルニ止メタガ其效果ハ同様デアツタ。然シ依然トシテ鼓膜ノ上部象限ノ充血ハ去ラズ耳語試驗ノ結果ハ2mニマデ減退シタガ會話語試驗ニハ變化ガナカッタ。此聽力減退ハ第8病日マデ認メラレタガ穿孔ハ起ラナカッタ。耳痛消失ハ第9病日ニ。臨牀的全治ハ第17病日ニ見ラレタ。

第2例。男。24歳。

長イ前カラ「ポリープ」ヲ伴ツタ慢性ノ耳聾ヲ有シ或ル大學ノ臨牀デ治療ヲ受ケテキタ。最近ニハ排膿ガ止マリ聽力モ殆ンド正常ニ復シタト云フ。然ルニ夫レカラ6ヶ月タツテ急性中耳炎デ當科ヲ訪レタ。當時鼓膜及ビ聽力ノ變化ハ少イ。最初カラ激烈ナ耳痛ヲ有シテキタノデ著者ハ之ヲ「ビタミン」ノミデ治療ヲ試ミ同様ニ耳痛消失ヲ達スル事ガ出來タ。第7日目ニ陳舊ノ穿孔部位ヨリ極ク少量ノ排膿ガアリ夫レ以後炎症ハ急速ニ輕快ニ赴キ第15日目ニ完全ナ臨牀的治癒ガ認メラレタ。

著者ハ茲ニ類似シタ2例ヲアゲタ。著者ノ經驗ハ今尙ホ32例ニ過ギヌガ。之ニ依ルト耳鏡的及ビ機能的變化ガ少ナクシテ激烈ナ放散性疼痛ノミヲ訴ヘテクル定型ニハ「ビタミン」 B_1 ガ最モヨク作用スルガ。穿孔シテ強度ノ排膿ヲ伴フ中耳炎ニハ餘リヨク作用シナイノデアル。著者ハ斯クノ如キ少數ノ經驗ノ結果ヲ全般的ニオシ廣メヤウナドハ思ツテキナイ。殊ニ「アノイリン」研究法ガナイ爲ニ。其作用機轉ハ全然分ツテナイカラデアル。尙ホ極メテ有效デアツタ症例ト並ンデ餘リ有效デナカッタ症例モアツタ事ヲ注意シテオク。

斯クノ如キ經驗ハ著者ノ神經痛治療ノ際ニモ認メラレ。文獻中ニモ亦散見サレルノデアル。

脚氣病ハ時ニ其初期症狀トシテ特ニ偏頭痛様ノ頭痛ヲ示ス事ガアル。此事實カラ出發シテ著者ハ機能性頭痛ニモ「ビタミン」 B_1 ニヨル治療ヲ試ミタ。茲デ思ヒ出スノハ或ル男子ニ就テアル。此患者ハ種々ナ醫師カラ凡ユル治療ヲ加ヘラレタガ何等效果ノ見ルベキモノナク。著者ノ許ヲ訪レタノデアル。著者自身モ現在行ハレ

テキル凡ユル治療法ヲ試ミタガ更ニ效ナク、考ヘツキテ「ビタミン」 B_1 ヲ用ヒタ所半年以來全ク治癒シテ了ツタノデアル。然シ残念ナ事ニハスカル奏效ノ著明デアツタ症例ノ外ニ餘リ效果ノ認メラレナカツタ症例モ存シテキル。「ビタミン」 B_1 デ治癒シタト云フ小文献モ現存シテキル。

慢性進行性難聴及ビ耳硬化症ニ「ビタミン」 B_1 ヲ用ヒルト云フノハ耳寄リノ話デアル。此際存在スル病理解剖學的ノ内耳變化ハ炎症性又ハ退行性性質ノモノデ時ニ血行循環障礙ヲ伴フ事ガアル。此爲ニ神經痛ノ所デ述ベタ所ニヨレバ「ビタミン」 B_1 ハヨク效ク筈デアル。アメリカノ文献デハ既ニ10年前動物實驗ニ於テ此種疾患ト「ビタミン」ノ缺乏殊ニ「ビタミン」A缺乏トノ間ニ關係ガアルト論ゼラレテキル。最近 Selfridge ハ此事ヲ肯定シ、尙ホ數多ノ營養の因子ガ存スルト述ベテキル。夫レニ依レバ「ビタミン」Cト骨組織代謝障礙、「ビタミン」 B_1 ト神經障礙トガ關係シテキルト云フ。Selfridge ハ初期ノモノ數例ニ於テ「ビタミン」Bニ富ム營養及ビ「ビタミン」 B_1 ノ注射ニヨリ聴力ガ舊ニ復シタト云ツテキル。ソシテ尙ホ聴力障礙ガ1024振動數ニマデ及ンダ場合ニハ「ビタミン」 B_2 ノ複合物が必要トナツテクルトツケ加ヘテキル。Müller ハ最近 Ther d. Gegenwニ於テ數年來ノ耳硬化症ガ1例ニ於テ全治シ、2例ニ於テ著明ニ輕快シタト報告シテキル。著者モ暫ク此方面ノ實驗ヲ行ツテキルガ、其結果ハ餘リ芳シクナイ。シカシ耳硬化症ノ際ノ耳鳴ニ對シテハ良結果ヲ有スルト思ハレル。又著者ハ Ménière ノ徵候群ガ「ビタミン」 B_1 デ全治シタ2例ヲ經驗シテキル。最後ニ嗅覺缺乏

ニ關スル經驗ヲ1例アゲル。

50歳ノ男子ニ對シ慢性扁桃腺炎ノ診斷ノ下ニ扁桃腺摘出手術ヲ行ツタ。其方法ハ普通ト變リナイ。患者ハ手術後6週間後ニ完全ナ嗅覺缺乏ヲ訴ヘテ來タ。

此際嗅器神經ト扁桃腺神經トノ直接關係ハ認メラレナイノデ著者ハ之ヲ次ノ如ク考ヘルヲ適當ト信ジタ。即チ患者ハ前ニ述ベタ傳染性疾患ガ「ビタミン」不全狀態ヲ齎スト云フ說ニ從ヘバ扁桃腺炎ノ爲メニ「ビタミン」 B_1 ノ不全狀態ニアリ。夫レガ手術ノ結果一方ニハ之ニ伴フ炎症性過程ニヨリ「ビタミン」 B_1 ノ需要ガ高マリ、一方ニハ扁桃腺摘出後營養供給ガ減少シタ爲メニ「ビタミン」 B_1 ノ供給モ減少スル爲メニ一層高度トナツタモノト考ヘタノデアル。實際此様ナ法則ニ從ツテ起リ得ルカドウカハ、將來ノ研究ニ俟ツ外ナイガ、兎モ角斯カル機轉ニヨツタ嗅神經機能ノ完全ナ消失ガ起ル事モ考ヘラレス事モナイノデアル。著者ハ此症例ヲ「ビタミン」 B_1 注射ヲ3回連續スル事ニヨリ完全ニ治癒センメテキル。

我々ノ脚氣防禦物質ニ對スル知見ハ「ビタミン」Aニ對スルヨリハルカニ多ク、從ツテ其應用範圍モ廣汎ニ亙ツテキルノデアル。然シ著者ハ此處デモ上皮保護「ビタミン」ノ所デ述ベタ事ヲ其儘繰リカヘンテ置カウト思フ。即チ、

1. 今迄ノ經驗ハ尙ホ箇人の經驗ト看做サルベキデアルカラ、尙ホ多クノ人ニヨツテ追試ガナサルベキ事。
2. 種々ノ矛盾ノ本質ヲ解明スル事。
3. 正確ナ追試。正確ナ意味ヅケハ「ビタミン」 B_1 ノ適當ナ檢出法ガ現ハレルニ至ツテ初メテ可能ナル事。ノ3項デアル。

「ビタミン」 B_1 ニ就テハコレダケニシテ最後ニ抗壞血病性「ビタミン」C即チ化學的ニ云ヘバ左旋性「アスコルビン」酸ニ移ラウ。此「ビタミン」ハ Szent-Györgyiニヨリ分離サレ。著者ノ故郷デ2年前ニ初メテ合成サレタノデア。此「ビタミン」ニハ臨牀上ニ應用サレ得ル檢出法ガアル。即チ夫ハ Harris 及 Rayニヨル荷重試驗デア。ル。「ビタミン」Cデ飽和サレテキナイ人ニ「ビタミン」Cヲ與ヘルト之ガ飽和サレルマデ體內ニ蓄積ガ起ルガ。飽和度ヲ越スヤ「アスコルビン」酸ハ尿中ニ排出サレテ來ルニ至ル。此處ニ於ケル「アスコルビン」酸ハ比較的簡單ナ染色試験ニヨリ「アスコルビン」酸價ノ上昇トシテ定量サレルノデア。然シ此方法ハ絶對ニ「アスコルビン」酸ニ特異的ナモノデハナク。他ノ還元性物質殊ニ「グルタチオン」及ビ「チステン」モ此反應ヲ示スト云フ缺點ガアル。蓄積ハドノ程度迄ガ生理的デドノ程度カラガ病的デア。ルカハ今ノ所見解ガ一致シテキナイ。「ビタミン」Cヲ血液、腦脊髄液又ハ組織中ニ檢出スル方法ニモ同様ナ缺點ガアル。

著者ヲシテ。我々ノ専門科ニモ「ビタミン」ノ障礙ハ特ニ考ヘネバナラスト痛感セシメタ1症例ヲ次ニ述ブル事ヲ許シテイタマキタイ。之ハ約2年前ノ話デア。患者ハ38歳ノ既婚婦人デ高度ナ汎副鼻腔炎ヲ有シテオリ。數週以來ノ苦痛ノ爲ト仕事不可能ニヨル栄養障礙ノ爲メトデ全身狀態ガ非常ニ惡カッタ。私ハ之ニ保存的治療ヲ試ミタガ效ガナイノデ上顎竇及ビ篩骨細胞ニ對シ手術ヲ行ツタ。手術ノ模様及ビ手術後ノ最初ノ經過ニハ格別ノ事ガナイ。3週間後患者ハ高度ノ疲勞ト上顎ニオケル神經痛様疼痛

ヲ訴ヘタガ。著者ハ其當時之ガ「ビタミン」缺乏症ノ初期症候トハ考ヘナカツタノデ。鼻部所見ガ全く正常デア。ル事及ビ體重増加ガ認メラレル事ヨリシテ。間モナク全治スルモノト思ツテキタ。

然ルニ手術後約4週間ニシテ突然患者ハ虚脱狀態ニ陥ツタ。殆ンド觸レ得ナイ頻數約160ニ及ブ脈搏ヲモツタ心臟發症ガツマイテ現ハレ。強心劑ヲ多量ニ與ヘテモ絶エザル嘔吐ヲ伴フ失神發作ヲ止メル事ガ出來ナカツタ。内科醫ニ往診ヲ頼ンダガ。内科醫ハ著者ノ「心筋炎」ト云フ診斷及ビ著者ノナシ來タツタ處置ノ適當ナ事ハ認メタガ。其原因ヲ手術ノ結果乃至ハ中毒性障礙ナラント云ツタ。著者ハ之ニ同意スル事ガ出來ナカツタ。何故ナレバ副鼻腔炎ハ臨牀的ニ此事ノ起ル際完全ニ治癒シテ居リ。他ニ化膿竈モナク。況ンヤ手術時用ヒラレタ「ノボカイン」溶液ガ4週間モタツテカラ中毒症狀ヲ呈シテ來ルトハ何ウシテモ考ヘラレナカツタ。

當時「ビタミン」Cガ中毒性心筋炎殊ニ「デフテリー」性心筋障礙ニ對シ格別ニ良ク作用スル事ヲ文献ニヨツテ知ツテキタノデ。之ヲ此場合ニ試ミ序デニ「ビタミン」C缺損量ヲ檢定シタ所驚イタ事ニハ壞血病ガ存在シテキル事ガ分ツタ。其内ニ激烈ナ咽頭炎ガ起ツテ來タガ其原因モ明カニハ分ラナカツタ。此例ニ於ケル凡テノ事實カラ著者ハ「ビタミン」Cノ缺乏ガ何等カノ關係ヲ有スルモノナラント考ヘ。之カラ出發シテ遂ニ咽頭炎ハ總テ「ビタミン」C不全症ノ表現ト看做シ得ルトノ考ヘヲ懷クニ至ツタ。斯クノ如ク考ヘレバ臨牀的ニ事實ヲ良ク説明スル事ガ出來ル。即チ「ビタミン」C代謝機能ノ平衡(Bilauz)低下ノ高度トナルヲ常ト

スル冬季、傳染性疾患時及ビ疾患後及ビ高年ニハ咽頭炎ガ多イノデアル。

此考ヘカラシテ著者ハ多數ノ咽頭炎症例ニ就キ「ビタミン」Cノ定量ヲ試ミ常ニ其缺損ヲ證明スル事ガ出來タ。之ニヨリ著者ノ考ヘハ正常ト思ハレルノデアルガ、Schönlackハ之ニ異論ヲ挾ンデキル。即チ彼モ自分ノ咽頭炎症例ニ「ビタミン」C缺乏ヲ認メテハキルガ、彼ハ之ヲ該疾患ニハ關係ナキ偶然的所見デアルトナシ、夫レヨリモ體質ノ問題ヲ重要視シテキルノデアル。

然シ今日「ビタミン」研究上是非必要ナ正常ナ検査方法ガ存在シテキナイ限り、如何ナル議論モ確率的ニシカ爲シ得ナイノデアツテ、上ニ述ベタ私ノ見解モ其當否ヲ完全ニ決定スル事ハ不可能デアル。

同様な問題ダガ實地上遙ニ重要ナ爲メ遙ニ深く研究サレテキルノハ齒槽膿漏又ハ“Paradentosis”（齒牙周圍症）ト「ビタミン」Cトノ關係デアル。此疾患ハ最近ノ見解ニ依レバ齒齦ノ化膿、齒牙ノ緩化及ビ齒槽突起ノ骨質消失ヲ特徴トスル症候ヲ指シテキルノデアル。此疾患ニ對シ近時「ビタミン」Cトノ關係ガ喧シク論議サレルニ至ツタノハ、「アスコルビン」酸投與ニ依リ到達セラレル輕快ハ症候のナモノニ止マラズ、齒牙周圍症其モノニモ原因的ニ作用スルカラデアル。著者ハ廣汎ナ齒科文献中カラBeyelerノ云フ事ヲ擧ゲテ置クニ止メヤウ。夫レニ依レバ、「カリエス」ナキ齒牙ニ於テ「ビタミン」Cノ缺乏ガ存スル場合ニハ齒牙及ビ顔面ニ神經痛様ノ疼痛ガ現ハレルト云フ。此見解ハ我々ノ専門領域ニモ當テハマルト思ハレル。Kutlebハ妊娠婦人ニ就テ粘膜ト「ビタミン」

Cトノ關係ヲ研究シテキル。此際對象トナツタ粘膜ハ齒齦ト陰壁トノミデアツテ咽頭粘膜ハ殘念ナ事ニ考慮サレテキナイ。Kutlebノ到達シタ結果ニヨレバ、粘膜障礙ノナキ妊娠婦人ハ「ビタミン」C缺乏症ヲ示サナイガ、粘膜ニ「カタル」性ノ所見ガ認メラレルモノニアツテハ「ビタミン」Cノ缺乏ガ存在スルト云フ。此結論ガ著者ノ咽頭炎ノ原因ニ對スル見解ト類似シテキル事ハ興味アル事實デアル。

著者ハ此論文ノ最初ニ於テ上氣道ニ疾患ノ存在スル際ニハ凡ユル種類ノ「ビタミン」不全症ヲ考慮シナケレバナラヌト論ジタガ、「ビタミン」Cニ關シテハ其證據ガ直接擧ゲ得ルノデアル。例ヘバGriebelガフランクフルト大學臨牀ニ於テ100以上ノ症例ニ就キ認メタトコロニヨレバ、「ビタミン」C不全症ハ之等疾患ノ際ニハ常ニ現ハレルモノデアツテ、之ハ殊ニ手術又ハ複雑ナ疾患ノ徑過ニ際シテ著シク、「アスコルビン」酸價ハ3000mg即チ前壞血病價ニ至ルト云フ。之ニ關シテハ先ニモ著者ノ咽頭炎ニ關スル研究ノ所デフレタ通り、長イ前カラ著者ノ所デモ調査ヲ行ツテキル。

中耳炎ノ臨牀の經過ガ細菌學の所見ノミカラ豫見出來ヌ事ハ周知ノ事實デアツテ、其他尙ホ毒性、免疫性、體質（Konstitution）、素質（Disposition）ノ問題ガ關係シテ來ル。著者ハ最近ポルドーノPortmannノ出版シタRevue de Laryngologieヲ通覽シ、今迄専門雜誌上デハ散見サレル事ガアル位ニ過ギナカツタ榮養ノ役割ハ「ビタミン」ノ作用ニ基ヅクト考ヘルト論ジタガ、其結論トシテ中耳炎ハ「ビタミン」C缺乏ニ伴ツテ起リ、之ヲ投與スル事ニ依リ臨牀像ガ輕快スルト述べ、尙ホ食料ヲ變化セシメル

事ハ大シテ效ナク。「ビタミン」C 缺損量ヲ正確ニ量リ之ニ應ジテ「アスコルビン」酸ヲ與ヘナケレバナラス事ヲ指摘シテ置イタ。

Denker 及 Kahler ノ全書中ノ論文デ Thost ハ鼻出血ガ通常局所的變化ニ基ヅクトナシテキルガ、其後間モナク Kindler ハ大キナ研究論文ニ於テ次ノ様ナ見解ヲ述ベテキル。廣汎ニ亙ル資料ノ統計的研究カラシテ、鼻出血ガ正常ト思ハレル鼻ニ出現スル事即チ症候性鼻出血ガ極メテ多イト云ヘル。之ヲ3群ニ分ケテキルガ第1群ハ血壓上昇ガ其原因ト思ハレル場合デアリ、第2群ハ血液病、出血性素質及ビ傳染病ノ際ノ如ク破綻性乃至濾蝕性出血ガ起ル場合デアリ、第3群ハ鼻粘膜ノ「カタル」性腫脹ガ原因ト認メラレル場合デアル。Kindler 自身此論文ニ缺陷ガアル事ヲ意識シテ、充分ノ補正ヲ要スルト述ベテキル。著者ハ此研究論文並ニ後代ノ文獻ヲ通讀シ、「ビタミン」C ノ缺乏ト症候性鼻出血トノ間ニ關係ガアルノデナйкаトノ見解ヲ持スルニ至ツタガ、紙面ノ都合上之ニ立チ入ツテ論ズル事ハシナイ。「ビタミン」C ガ試験管内ニ於テ血液凝固ヲ促進スル事ハ確カデアルガ、生體內ニ於テハ條件ガ恐ラク本質的ニ異ナツテキルモノト考ヘラレ、實驗成績モ區々決定シテキナイ。此爲メ皮膚出血、血友病、腎臟出血、肺出血及ビ子宮出血ニ際シテ「ビタミン」C 療法ハ時ニ著效ヲ奏スルモ、全ク效果ノ見ラレヌ事モアルノデアル。現在ノ所デハ結核性出血ノ際ニ於ケル「ビタミン」C ノ作用ヲ詳細ニ研究シテキル Hasselbach モ云フ様ニ Wi-denbauer ノ見解ガ最モ當ツテキルト思ハレル。即チ出血性素質ハ他ノ種々ナ補助的因子ニヨリ條件ヅケラレタ所ノ「ビタミン」C 不

全症ノ一現象形態ニ過ギスノデアル。

Szent-Györgyi モスクノ如キ考慮カラ出發シテ透過性「ビタミン」Permeabilitätsvitamin P ノ發見ニ至ツタノデアル。此「ビタミン」P ハ出血ニ際シ「ビタミン」C ト併用シテ效果ヲ有スルデアラウト豫想サレルガ、未ダ研究ガ充分デナイ爲メ、斯カル斷定ハ尙ホ補正ヲ受ケネバナラスデアラウ。

約1年前ジュネーブノ Zimmet ハ唾液中ノ「アスコルビン」酸ノ定量ニ就キ興味アル報告ヲナシタ。之ニヨリ扁桃腺及ビ齒牙周圍症ニ關スル議論アル問題ニ新ラシイ方面カラ解決ノ道ガツイタト期待サレタノデアル。著者ハ此報告ヲ箇々ニ就キ追試シタガ別ナ結果ニ到達シテキル。又 Zimmet 自身モ其結果ノ一部ヲ取消シテキル次第デアル。然シ著者ハ扁桃腺ノ生理學及ビ病理學ニ關スル問題ガ斯カル方面カラ解決サレテ行ク事ヲ希望シテ止マヌ次第デアル。

扁桃腺ガ傳染竈ト看做サレル場合完全摘出ヲ行フ事ハ周知ノ事實デアリ、多クノ耳鼻咽喉科醫ハ之ヲ常ニ適當ナ處置ト考ヘテキルガ、著者自身ハ特定ノ場合ニシカ之ヲ行ハナイ。今日扁桃腺摘出術ノ適應症ヲ確實ニ定メル事ノ出來ナイノデ、局所的ノ性狀、腺窩内容検査、細菌學の所見、血液ノ性狀並ニ既往症ヲ參考トシテモ尙ホ之ガ定メラレヌ場合ガアル。著者ガ最近 M-schr, Ohrenheilk. デ論ジタ様ニ扁桃腺炎ノ際ニハ「ビタミン」C 缺乏症ガ起ツテ來ルガ、此事ハ既往及ビ臨牀上ニ認メラレヌ際ニモ適應症ヲ定メルノニ應用サレ得ルト思フ。但シ前ノ論文デモ結語トシテ述ベテ置イタ通り、今日尙ホ方法論ガ曖昧多義デアルノデ結果ノ意味附ケニハ充分ナ注意ヲ必要トスル。

一般ニ人體中ニ於ケル如何ナル病的經過トイヘドモ、實ニ多種多様な反應ヲ現ハシテクルモノデアツテ、一傳染症ト雖モ局所的變化ニツイデハ體液ノ障礙ヲ惹起シ、白血球並ニ赤血球ニ數的量的ノ影響ヲ與ヘ、「グロブリン」ト「アルブミン」トノ比率ヲ變化セシメ、血液粘稠度、血球沈降速度ノ價ヲ變化セシメ、進ンデハ「カルシウム」、糖等ノ含量ヲモ變化セシムルニ至ル。斯カル多種多様な變化ノ間ニアツテハ「ビタミン」ト雖モ其一小部分的ナ役割ヲ演ジテキルニ過ギナイ。而シテ今迄ニ割合其態度ノ判然トシテキルノハ「ビタミン」C ダケデアル。著者ハ此論文ノ冒頭ニ於テ「ビタミン」研究ガ今日ノ醫學ニ於ケル考ヘ方ヲ根本的ニ改革シ、多數ノ議論サレテキル問題ヲ解決スル使命ヲモツテキルト論ジタガ、論文ノ終リニ至ルモ

尙ホ其證據ヲ舉ゲル事ノ出來ナイノヲ深く遺憾ニ思フ次第デアル。之ハ一面ニ於テ「ビタミン」ノ研究ガ尙ホ其出發點ニアリ、他ノ病的過程トノ關係ガ未ダ通覽シ得ルニ至ツテキナイ事ヲ物語ルモノデアツテ、今後一層廣範圍ノ人達ニヨリ、モツト適當ナ方法ヲ用ヒテ追試ガナサレナクレバナラスト思フノデアル。

尙ホ他ニ資料ナキ爲メ論文ノ資料ヲ著者ノ経験カラノミ求メタ爲メ、論旨ガ主觀的ニ過ギタカモ知レスト思ツテキル。此點大イニ濟マスト思フ次第デアル。

最後ニ我々ガ今日「ビタミン」ニ期待スル所ノモノガヤガテ實現サレテ、人類共通ノ敵ニ對スル新ラシイ強力ナ武器ガ生レル事ヲ切ニ希望スル次第デアル。

學 會

朝鮮地方會第八回總會(第二十六回集會)記事

(京城帝國大學醫學部小林耳鼻咽
喉科學教室開講十周年記念講演會)

日時 昭和13年4月24日午後1時

會場 京城帝國大學醫學部A臨牀講堂

〔韓 基 澤 編〕

開會之辭 小林會長

1. 我方教室十箇年間(自昭和3年 至昭和12年)

ニ於ケル患者ノ統計 吉村邦一

小林教授開講10周年記念ニ當リ我が教室10箇年間ニ於ケル患者56452人ニ就テ詳細報告ス。

2. 我方教室十箇年間ニ於ケル

乳嚢突起炎ノ統計的觀察

上田博美

我が教室10箇年間ニ於ケル乳嚢突起炎患者ハ862

例ニシテ、中耳炎患者12126例ニ對シ7.1%ニアタル。乳嚢炎ハ中耳炎同様男性ニ多ケレド、乳嚢炎患者ノ中耳炎患者ニ對スル%ハ男女間ニ大差ナシ。患側ハ左右略ニ同率。年齡的ニハ1—15歳ニ最モ多シ。季節的ニハ1、2、3、4月ニ多ク、就中3月ニ最モ多シ。

急性乳嚢炎ヲ併發セル中耳炎ノ誘因ハ感冒最モ多ク、麻疹、猩紅熱ニ次グ。急性中耳炎發病ヨリ急性乳嚢炎併發マデノ日數ハ11—15日ノ